

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520045

研究課題名(和文) 清朝ムスリム学者劉智『天方性理』における形而上学

研究課題名(英文) The metaphysics in "Tianfang Xingli" by Liu Zhi as Mulim Intellectual in Qing Dynasty

研究代表者

青木 隆 (AOKI, Takashi)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：20349947

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：劉智『天方性理』で劉智が用いている多くの思想概念語(天人一致などのターム)の典拠を網羅的に調査し、『天方性理』におけるそれらの語の用法と宋代から清初までの中国思想文献での意味用法との比較を行なった。その結果、『天方性理』の思想概念語の用法は、その多くが明末から清初にかけての用法と同じであるが、一方で中国伝統思想文献に見られない用法も、前者より少ないが、少なからず見受けられることがわかった。伝統中国思想と全く異なる、劉智独自のムスリム思想が後者に集中的に表現されていると考えられよう。

研究成果の概要(英文)：There are many philosophical terminologies, such as 天人一致, in Liu Zhi "Tianfang Xingli (天方性理)". We Exhaustively investigated the exsample of these terminologies in Chinese traditional philosophical text from Song Dynasty to early Qing dynasty. In many cases the terminologies in this book are the same as the usage of Chinese traditional philosophical text, but relatively small numbers of those are completely different from the usage of Chinese traditional philosophical texts. It is conceivable that the latter is the intensively representations of Liu Zhi as a Muslim philosopher his own thoughts.

研究分野：中国哲学

キーワード：劉智 中国ムスリム思想 朱子学 真経昭微

1. 研究開始当初の背景

鄧小平政権の改革開放政策以後、回族出身の研究者たちが明清中国ムスリムの漢文思想文献の研究を開始し、主要なテキストとして『回族和中国伊斯蘭古籍資料彙編』(寧夏少数民族古籍整理出版小組 天津古籍 1987)を嚆矢として、近年、大型叢書が陸続と出版され、研究条件が整備されている。その間、劉智研究の専著としては、金宜久『中国伊斯蘭探秘 劉智研究』(東方出版社 1999 北京)および沙宗平『中国的天方学 劉智哲学研究』(北京大学出版社 2004)が刊行されているだけでなく、劉智『天方性理』の現代中国語訳(馬三宝・李三勝訳『白話天方性理』中州古籍 1994 鄭州)および英訳(Sachiko Murata, William Chittic, Weiming Tu "The Sage Learning of Liu Chih: Islamic Thought in Confucian Terms" Harvard Univ. Asia Center 2009)も刊行されており、活況を呈している。

このうち、中国語の著作は、在野とアカデミズムの回族出身のムスリム研究者によるもので、英語の著作は在米のイスラム学者によるものである。したがって、両者ともにイスラム思想の観点から劉智の著作を分析する視点を有するものであるが、実際の訳文は、古典漢語を現代中国語に置き換えたり、英語に置き換えたものの域にとどまっており、劉智の独自のイスラム思想のダイナミズムを掬い取ることができず、手をこまねいている印象である。

2. 研究の目的

劉智『天方性理』の原漢文を単に現代日本語に移し変えただけの訳注の作成では、先行の中国語訳注・英語訳注を発展させたものにならない。したがって、本研究の目的は、劉智の思想のダイナミズムを現代日本語の訳注を通して再現するような訳注の作成とその解説にある。

3. 研究の方法

先行研究は、いずれも、劉智が依拠したとしいアラビア・ペルシャ語文献や朱子学文献への参照を行なっているが、直接劉智のテキストを理解するのに役に立つ水準に到達していない。われわれの考えでは、以下の3つの研究方法が必要である。

(1) アラビア・ペルシャ語文献と朱子学文献にとどまらず、中国の儒・佛・道、さらには中国医学・天文学文献、耶蘇会士文献、漢文イスラム文献などとの関連を幅広く調査する。これらについては、先行研究が朱子学のタームの指摘とラージー『ミルサード』などのペルシャ語イスラム思想文献の典拠の指摘、およびイブン・アラビーの存在一性論との関連性の指摘にとどまっていた。われわれは、調査する文献の範囲を広げ、儒教文献だけでなく、佛・道・耶蘇会士などの思想文献に加え、中国医学と天文学を中心とする中国科学文献、さらに中国イスラムの漢文文

献まで調査の対象とした。また、重要なターム・引用句については、出典だけでなく、劉智の時代に至るまでのそのタームの意味や用法の歴史と劉智のテキストを丁寧に比較することにつとめた。こうすることによってのみ、劉智のテキストが同時代に放った意味の連関がつかめる。それはまた、同時代の中国人の知識人が劉智のテキストを読むときの解釈の水準を示すことを意味する。こうしてわれわれは、清初の一般的な中国思想の水準から劉智のテキストを眺めることができる。

(2) 中国伝統思想文献からの引用と思しい表現が見つかったら、中国思想文献との意味用法の違いを検討する。劉智が『天方性理』で駆使している中国思想文献のターム・引用句のなかには、劉智以前の中国思想文献には見られない独自の使い方をするものがしばしば見られる。そのような箇所には、中国の伝統思想文献に対する劉智なりの新たな解釈がこめられていると見なさねばならない。伝統的中国知識人は、四書・老荘思想などの解釈を通じて自分の思想を表現するのが常であるからである。劉智の独自の思想を見出す手がかりをこの方法によって探す。劉智思想の背景をなす地が(1)とすれば、(2)は(1)を背景として明瞭に浮き上がる図である。

(3) 劉智の思想は、劉智以前の中国思想にも、ペルシャ・アラブのイスラム諸思想のいずれに還元することを容易に許さないきわめてオリジナルな思想である。そこで、既知の思想体系によりかかって劉智のテキストを再構成することなく、劉智独自の形而上学の理論的骨格を抽出する必要がある。(1)と(2)で得られた材料をもとに、最新のイスラム思想史研究の成果を踏まえつつ、劉智のテキストに即して彼独自のイスラム思想の理論的骨格を抽出する。たとえば、劉智は、ペルシャ語イスラム文献にならってマクロコスモスとミクロコスモスの連関する様子を詳述しているが、それは、既知のペルシャ思想のマクロコスモス・ミクロコスモス論では説明のつかないものである。どうしてもこの方法によって劉智思想における両者の連関をうまく説明するモデルを獲得することが必要である。

4. 研究成果

(1) 平成 24 年度は、研究討論会を合計 16 回行い、主に『天方性理』巻三の「概言」・「人生元始図説」・「胚胎初化図説」を対象とし、以下のような成果を得た。ミクロコスモスの生成を取り扱う巻三は、従来その重要なソースとして、田テ王的な中国医学文献、耶蘇会士文献、マクサド・アクサなどのペルシャ語文献、マワーキフなどのアラビア語文献が想定されており、実際にその通りである。しかし、文献的根拠が具体的に明らかになっただけでは、巻三の内容はなかなか理解できず、隔靴搔痒の感があった。当該年度より、『四庫全書』・『道藏』『黄帝内經素問』その他の

データベースを駆使することにより、劉智の用いる語彙とその用法が、宋代から清代初期にかけての中国知識人が用いていた用法にぴったり一致していることが明らかになってきた。たとえば、巻三「概言」では、「造物自然の妙」、「天人一致の精」などという語が用いられているが、これまでは単なるレトリックとしか認識していなかった。実は、こうした語彙は宋代の思想文献を淵源としているが、長い時間がたつにつれて意味と用法を変化させながら、清初には士大夫の一般的な語彙としてひろく用いられるようになっていく。こうしたことを手がかりに、本文の分析を行なったところ、辞書をひくと造物主の意味で登場する「造物」は、劉智のテキストでは被造物を指し、「自然」とは生生已むことのない天地の万物を生み育てるありようを指し、「妙」とはその万物を生み育てるはたらきの匙加減の絶妙さを指す。「天人一致」も、とくに劉智の独自の用法でなくて、近世の中国思想で言う「天人一致」と同じく、天地万物と聖人が一体となっている状態を指し、巻三に即して言えば、継性顕著図説にいう「公共の継性」と「私の継性」の区別のない状態をいう。

(2) 平成 25 年度は、研究討論会を合計 28 回開催した。24 年度に引き続き、巻三「概言」から「内外體竅図説」までの巻三前半部を討議の主たる対象とし、以下のような成果を得た。

昨年度と同じく、巻三によく用いられる特徴的な思想語彙を取り上げ、宋代から清初までの中国思想文献における意味用法の歴史的展開を明らかにし、劉智の用法と比較を行なった。劉智は神の存在を「実有」と表現することが多いが、中国近世の思想文献では、このような用法は一切存在しない。劉智以外の漢文イスラーム文献では、「原有」の語を用いており、劉智の独自性が注目される。劉智はミクロコスモスを「小世界」の語で指すが、一般的な中国思想文献では、「小天地」の語を用いる。劉智以外の漢文イスラーム文献では「小世界」の語を用いない。また、王岱輿は「小天地」という語で人体を表現する中国思想を罵倒している。ムスリムの嫌う人体=小天地という発想を小世界という語に代えて独自のマクロコスモス・ミクロコスモス論を組み立てている点に劉智の独自性が見られるのではないかとわれ、非常に興味深い。

四本分著図説から表裏分形図説への展開から四元素の運動の意義を読み解くことによって、大世界と小世界の生成の諸段階でいたるところに見られる逆方向の四元素の運動の逆転構造が、世界の創造の説明原理になっているとともに、一方で大世界と小世界の区別を明確なものにするはたらきがあることが判明した。

(3) 平成 26 年度は、研究討論会を合計 27 回開催した。平成 26 年度より、巻三および

巻三以外で訳注の作成が遅れている箇所を集中的にとりあげて討論の対象とし、以下のような成果を得た。

巻一の陰陽始分図説から万物始生図説に至る万物生成の過程が、太極より陰陽の両儀を経て四象を生じ、八卦の生成に発展し、最終的に六十四卦の生成に至るいわゆる先天易の生成過程を下敷きにした形で構想されていることを発見した。

巻三の内外體竅図説では、能と神経が論じられており、これまで脳と神経の働きを中国世界に伝えた耶蘇会士文献から取り入れたものであるとのみ考えていた。しかし、内外體竅図説をよく読むと、神経を論ずる際に諸臓器と感覚器官の対応関係を能と神経が形成する神経ネットワークで説明している。耶蘇会士文献のもたらした医学知識にはこうした視点が欠けているのに対し、イブン・スィナー『医学典範』は劉智とよく似た説明をしている。劉智が耶蘇会士文献以外に、イスラームの医学知識に何らかの形で接していることは確実であると思われる。

巻五名相相依図説において F. Furutado『名理探』に用いられているアリストテレス由来の論理学のターミノロジーが用いられていると思しいことを発見した。これは、中国思想史上に『名理探』の影響は残されなかったという学界の通説を覆す発見である。

(4) 平成 27 年度は、研究討論会を合計 26 回開催した。以前作成した『天方性理』巻四訳注の未解明箇所を集中的にとりあげて討論の対象とし、以下のような成果を得た。

敬虔なムスリムである劉智が自らの思想言語中に用いる朱子学のタームはしばしば、伝統的な中国士大夫たちの朱子学タームの用法と異なっている。そこで、『天方性理』に引用されている四書やそのほかの古典籍の引用の仕方を分析しなおすことを進めた。たとえば、巻 4「順逆分支図説」には、「人欲に純にして天理の正しきに合せざるを逆と曰ふ」とあり、この「天理の正しきに合す」は、朱熹『論語集注』述而篇の語である。『論語』のこの箇所は、衛の出公輒に対する孔子の評価を冉有に尋ねられた子貢が、孔子の考えを探るために伯夷叔斉のことを尋ねた箇所である。朱熹は、伯夷叔斉の態度を「天理の正しきに合して人心の安に即する所以を求めた」と評している。『論語集注』のこの箇所は、後世の儒者の注目を浴びた形跡はない。劉智がこの箇所をわざわざ引用するのは、それなりの理由があつてのことである。長幼の序を重んずる弟の叔斉は、父王から位を譲られたが、兄を差し置いて自分が位につくことはできぬと考え、一方、父子の序を重んずる兄の伯夷は、父から位を譲られたのでないで、自分が位につくことはできぬと考えた。父子の序と長幼の序が矛盾するときに、どうすればよいのかという問題がここに語られている。劉智は、順と逆が錯綜し、何が順であり逆であるのかわからないようなと

きにどうするべきかをこの図説で考えようとしていることになる。

また、懸案であった、ジャーミー『ラウィフ』ペルシャ語原点と劉智によるその漢訳『真境昭微』との比較検討により、劉智の存在論的タームの意味用法を確定し、『天方性理』訳注に反映させる作業もようやく少しずつ進んできている。たとえば、劉智の「実有」は、神の本体を指す概念語であるが、こうした語彙は『真境昭微』の文脈でその意味用法を吟味する必要がある。これまでは、『真境昭微』の漢文表現が難解なため、ほとんどその作業が進んでいなかったが、ペルシャ語原本『ラウィフ』とのつつき合わせが進み、とりわけ巻一の最初無称図説から陰陽始分図説までのイブン・アラビーの存在一性論的なウジュード自己分節過程におけるタッジャーリー構造把握がもう少しで可能なところまでできている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7 件)

(1)中西 竜也「近代中国ムスリムのイスラーム法解釈」『東洋史研究』、査読有、74-4、2016、824-858

(2)佐藤 実「『清真釈疑』におけるムスリムの儒者批判」『知の継承と展開 イスラームの東と西』、査読有、明治書院、2014、205-227

(3)佐藤 実「中国イスラーム思想史研究の幕開け」『東方』、査読無、387号、2013、27-32

(4)中西 竜也「経堂語とその周辺 回族の使う言葉」『中国のムスリムを知るための60章』、査読有、明石書店、2012、66-70

(5)中西 竜也「経堂教育 清真寺におけるイスラーム教育」『中国のムスリムを知るための60章』、査読有、明石書店、2012、157-161

(6)中西 竜也「中国イスラームの経典 中国に流布したアラビア語・ペルシア語文献」『中国のムスリムを知るための60章』、査読有、明石書店、2012、162-167

(7)佐藤 実「回儒 中国イスラームの思想的営為」『中国のムスリムを知るための60章』、査読有、明石書店、2012、208-212

〔学会発表〕(計 3 件)

(1)佐藤 実「中国イスラーム漢籍に見える女性観」、中央大学経済学部・ジェンダー研究会、2014年11月28日、中央大学経済学部

(2)中西 竜也「ルーフ(霊)は性か気か? 中国ムスリムの訳語選択とその歴史的背景」、人文科学研究所研究班・古典解釈の東アジア

的展開 宗教文献を中心課題として、2013年12月21日、京都大学人文科学研究所

(3)Nakanishi, Tatsuya, "Sainthood and Numinous Texts: Why did Chinese Qadirī Sufis Preferably Use Taoist Words?" Second CNRS-KIAS/SIAS Joint Seminar (Second French-Japanese Seminar): Saint Cults, Mausoleums and Sufi Lineages, 22 November 2013, CNRS, Paris.

〔図書〕(計 1 件)

(1)中西 竜也『中華と対話するイスラーム 17-19 世紀中国ムスリムの思想的営為』京都大学出版会、2013、総 420 頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

青木 隆 (AOKI, Takashi)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号: 20349947

(2)研究分担者

仁子 寿晴 (NIGO, Toshiharu)

京都大学・アジアアフリカ地域研究研究科・准教授

研究者番号: 10376519

黒岩 高 (KUROIWA, Takashi)

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号: 60409365

矢島 洋一 (YAJIMA, Yoichi)

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号: 60410990

佐藤 実 (SATO, Minoru)

大妻女子大学・比較文化学部・准教授

研究者番号: 70447671

中西 竜也 (NAKANISHI, Tatsuya)

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号: 40636784